特攻勇士に感謝と敬意を

会報 特攻
平成28年1月

第 108 号

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会

〒102-0073　東京都千代田区九段北
3-1-1靖國神社遊就館内・地階

電　話　03（5213）4594
ＦＡＸ　03（5213）4596

http://www.tokkotai.or.jp
振替口座　00140-6-59580

編集人　飯田正能
発行人　羽渕徹也
印刷所　ヨシダ印刷株式会社

目　次

特攻勇士に感謝と敬意を……1
平成28年　年頭のご挨拶……2
謹賀新年……3
遠くの声を探して
決断と懊悩と―KAMIKAZE
と呼ばれた若者たち……3
平成28年度慰霊行事予定……8

平成28年　年頭のご挨拶

理事長　杉山　蕃

皆様、新年明けましておめでとうございます。それぞれに清々しい初春を迎えられたことと拝察申し上げると共に、本年が良い年であります祈念申し上げます。

昨年は、終戦70周年の節目の年でありました。当顕彰会の活動は、順調に推移致しましたが、70周年でもあり、若干の新企画を執り行いました。具体的に申し上げますと、靖國神社及び世田谷山観音寺での年次慰霊祭、全国各地の慰霊行事への参加・支援、特攻観音像の寄進、機関誌の発行等の恒例業務を整斉と実施致しました。これに加えて、二つの事業を起こしました。一つは産経新聞への広報の実施です。8月15日と10月25日の2回にわたり、東京・大阪版両方で、私共の主張を掲載致しました。初めての試みでありますが、特攻隊戦没者への追悼の気持ちと、公益財団法人としての我々の存在を全国に広告する見地から、また会員募集の面からも前進があったものと考えております。今後も引き続き、機を見てこの種の広報を継続して参りたいと考えております。二つ目は、特攻隊員の残された手記の出版です。年末、海軍予備学生（14期）森丘哲四郎大尉（昭和20年4月29日沖縄本島沖にて戦死）の遺された大学ノート9冊にわたる手記を、御遺族のご好意を得て、当顕彰会から出版したものであります。特攻隊員が遺された資料は沢山ありますが、ともすれば、出版社の恣意に侵される傾向がある中、一級の史料であり、戦禍に埋没しがちな戦没者の直向きな気持ちを伺い知ることができる貴重な遺書であります。御遺族が高齢を迎える中、このような資料の埋没を防ぐ意味からも、今後ともこの種事業は継続していかねばならないと考えているところであります。

昨年から、世界情勢はかなりの不安定さを加えてきました。一つは、パリにおける同時多発テロ事件です。中東におけるイスラム過激派の武力抗争と連動し、世界各地で無辜の市民に被害を及ぼす、この種の動きは理不尽であり、対立の根深さもさることながら、断固排除されるべきでありましょう。東京オリンピックという大事業が4年後に控える我が国にとっても、その対策は極めて重要です。もう一つの不安要因は、中国の動きにあります。急激な軍事拡張は、海軍を中核とし、極めて急ピッチで、戦前の日本以外に例が無いと言われております。空母外洋艦隊を作り上げ、「一帯一路」と自ら呼称する経済圏の拡張・発展を達成しようとする世界戦略は壮大でありますが、各所で軋轢を生ずることも否めません。特に南シナ海の旧新南諸島、西沙諸島の領有を巡る活動は活発で、周辺沿岸国を無視した強引なものです。これは南シナ海全域を「領海」とする九段線（台湾は十一段線）理論を根拠とし、全水域を内水とするもので、国際海洋法上とても認められるものではありません。我が国は輸出入の多くをマラッカ海峡、南シナ海の公海を経由しており、公海の領海化は、重要な問題です。「埋立地には領海はない」という正論の下、米国も艦艇派遣に踏み切りましたが、今後の動向は、安全保障上は勿論、経済活動上も重大な問題です。

これに比して国内政治の動向は、矮小の一語に尽きます。安保法案審議を見ても、「戦争法案」等、過激な言葉を徒に用いて人心を攪乱するが如き風潮が横行し、党利党略優先の論戦に終始しました。民主主義の定着した国家としては、内なる議論も結構ですが、国際政治での強い結束力をもって、誇れる国家像を推進してほしいと願うところです。

昨年4月に、畏れ多くも、天皇、皇后両陛下のパラオ方面への慰霊行幸啓を戴きました。更に本年はフィリピン国への公式御訪問に際し、現地で戦没者慰霊の行事が予定されており、大御心の深大さを改めて感謝申し上げると共に、我々戦没者慰霊に関わる者と致しましては、一層務めに邁進しなければならないことを御教示頂いたものと心致しております。私共特攻隊戦没者慰霊顕彰に携わる者と致しましては、新しい年と共に、一層の務めを果たすことが必要と感じ入る次第です。皆様のご支援の下、更に1年、特攻隊員の慰霊顕彰を通じ、健全な国民意識の醸成という公益目標に取り組んでいきたいと考えております。

重ねて、皆様にとりまして良いお年となりますよう祈念申し上げ、年頭のご挨拶と致します。

遠くの声を探して
決断と懊悩と―KAMIKAZEと呼ばれた若者たち
国防の任務は「苦役」ではなく、むしろ崇高な行為ではないのか。特攻に殉じた先人を思う。

ジャーナリスト・月刊誌『正論』前編集長　上島　嘉郎

（編注・本稿は、月刊誌『正論』（産経新聞社発行）の平成27年11月号に掲載されたものであるが、特攻に殉じた若者たちの真情を良く書き表しており、小論ながら特攻の本質に触れる貴重な著作として会員に推奨したいので、特に発行社のご好意と著者のご了解を得て転載させていただいた。

なお、紙面の都合上、一部割愛させていただいた。）

◇

彼らの採った手段があまりにも過剰でかつ恐ろしいものだったにしても、これら日本の英雄たちは、この世界に純粋性の偉大さというものについて教訓を与えてくれた。彼らは一〇〇〇年の遠い過去から今日に、人間の偉大さというすでに忘れられてしまったことの使命を、とり出して見せつけてくれたのである。（『神風』ベルナール・ミロー著／内藤一郎訳）

※

集団的自衛権をめぐる議論でどうにも違和感が拭えなかったのは、徴兵制を憲法十八条が禁じた「意に反する苦役」にあたるとした政府見解である。立法趣旨の本質を意図的に外し、ただ国民に不安を抱かせる印象操作を狙った民主党やマスメディアの〝難癖〟に、便法としてやむを得なかったのかも知れないが、「苦役」を広辞苑で引くと、〈①（主として肉体的に）苦しい労働。「―に耐える」②懲役または徒刑。「―に服する」〉とある。字義どおりに受け取れば、兵役に就くことは「苦しい労

謹賀新年

公益財団法人　偕行社
理事長　志摩　篤
副理事長　塩田　章
副理事長　深山　明敏
副理事長　冨澤　暉
副理事長　白石　一郎
専務理事　大越　兼行
事務局長　若木　利博

公益財団法人　水交会
会長　藤田　幸生
副会長　古庄　幸一
理事長　齋藤　隆
副理事長　加藤　保
専務理事　赤星　慶治
事務局長　本多　宏隆

つばさ会
会長　吉田　正
副会長　藤川　壽夫
副会長　山本　修三
副会長　外薗健一朗
副会長　片山　隆仁
副会長　鹿股　龍一
専務理事　長島　修照

公益財団法人　大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
会長　島村　宜伸
理事長　柚木　文夫
専務理事　圓藤　春喜
事務局長　岩田　司朗

公益財団法人　海原会
理事長　堺　周一
副理事長　酒井　省三
専務理事　助村　隆典
（事務局長兼務）

公益社団法人　隊友会
会長　西元　徹也
理事長　先崎　一
常務理事　増田　好平
常務理事　吉川　榮治
常務理事　吉田　正
常務執行役（総務担当）　三本　明世
事務局長　植木美知男

公益財団法人　特攻隊戦没者慰霊顕彰会
理事長　杉山　蕃
副理事長　藤田　幸生
専務理事　衣笠　陽雄
事務局長　羽渕　徹也

働」であり、「懲役」と同義となる。ならば永世中立を掲げるスイスは全国民に懲役を科しているのか。これをスイスは集団的自衛権を否定しているからだという意見がある。一国だけで国を守ろうとすれば、国民は意に反した労働に耐えねばならず、集団的自衛権を認めている国は、それをしなくても済む、徴兵されることはないということか。この問題は本来、そうしたある種の損得論に置き換えていいことではない。

国防の任務に就くことを求められるのは「苦役」なのか。そしてそれを拒否することは国民の権利なのか。国防の任務は苦役ではなく、むしろ崇高な行為なのではないか。なぜこうした議論が起きないのか。今日的人権観に照らせばそんなことは当然ではないかと言われそうだが、本当にそれを当然としていいのか。

なぜ私がこんなことを考えるのかといえば、特攻隊のことを考えているからである。極端に聞こえるのは承知の上、徴兵が苦役（懲役、徒刑）でしかないならば、特攻隊員の「十死零生」は国が科した死刑ということになる。無駄死に、犬死にですらない、刑罰としての必死なのだ。そこに名誉はなく、「国防」というものへの意義も敬意も見出されないことになる。

迂遠な話をする。日露戦争における旅順港閉塞作戦について、参謀の秋山真之は当初、「流血の最も少ない作戦こそ最良の作戦」として作戦実施には消極的だった。出動部隊が「決死」ではなく、「必死」となることを見通したからである。それに対し秋山の友人でもあった広瀬武夫は、「断じて行えば鬼神も之を避く。骨がらみになっても押して押しまくってゆく以外に成功は開けない」と主張する。

東郷平八郎が決断して閉塞作戦は実施されることになり、港口閉塞に必要な下士官以下の人員六十七名を艦隊から募ると、約二千人が応募、中には血書して志願する者、艦隊幹部に直訴する者もいた。これにさすがの広瀬も驚き、「この戦は勝つ」と秋山に語ったという。概略広瀬が語ったのは、自分たち士官は年少の頃から軍人を志し、そのための教育と礼遇を受け、戦いで死ぬことがあっても本望だが、閉塞作戦に志願した兵はそもそも軍人ではなく、徴兵されたシビリアンなのだ。初めから軍人たるべき道を歩んできたのではない彼らが志願したということは、ロシアとの戦争が日本の興廃を決する国民戦争であることを彼らが自覚している証で、彼らの熱意と誠意はきっとこの戦いを勝利に導く、というものだった。

決死隊の選抜基準は、二千人の中から最も肉親の係累の少ない者とされ、広瀬自らが率いたが、港口閉塞は遂に成功しなかった。広瀬が語ったシビリアンの熱意と誠意がその後いかに発揮され、薄氷を履むものであれともかく日本の勝利に至ったことを、現在の私たちは「苦役」に耐えての結果と見るのだろうか。そうではあるまい。明治の日本人（シビリアン）は「国防」を崇高な任務と受け止めていたのである。国家という意識に目覚めてまだ若く、明治の日本はまさに青春期の献身の時代だったと言えるだろうが、大人になるとは冷静になることではあっても、何がより肝心な、守るべき価値であるかを曖昧にすることではない。

特攻に殉じた若者たちのことを想像する。彼らは特攻命令を理不尽と感じただろう。指揮官自らが「統率の外道」と言ったのだ。それでも彼らは行った。なぜそんなことができたのか。出撃前の彼らの写真を見ると、みな笑顔で、すっきりした迷いのない顔つきをしている。数時間後には敵艦に突入して死ぬと決まっている者が、なぜあんな表情でいられるのか。平時ならば、これからが人生という航海に本格的に漕ぎ出す二十歳前後の若者がほとんどだ。それがただの一幕芝居のように自らの人生に終止符を打たねばならない。彼らに懐悩がなかったはずはない―。

・・（中略）・・

特攻隊を論ずることは難しい。軍事作戦として命じた指揮官が褒め称えられることではない。しかし、それに殉じた若者たちに満腔の敬意と謝意を表し、「後生として決してあなたたちを忘れない」と告げることに、何をためらう必要があろうか。

私はかつてあるシンポジウムでこのような話をし、閉会後に特攻隊員の遺族という男性から「特攻隊を美化して

ジャーナリスト
上島嘉郎氏

昭和33（1958）年長野県生まれ。愛媛県立松山南高等学校卒。産経新聞社サンスポ編集局勤務。「月間日本」創刊編集長を経て、平成10年から産経新聞社雑誌「正論」編集部。17年「別冊正論」編集長、18年「月刊正論」編集長。26年7月産経新聞社退社。フリーランスとして活動を始める。

くれるな」と言われたことがある。

だが、一体美化とは何だろうか。過酷な時代に生き、結果的に自らの短い人生の完全燃焼を祖国に報いることに重ね合わせた行為を、そのままに受け止め、語り継ごうとすることは美化なのか。

たしかに、彼らはあの時代の日本に居たのだ。それを存在しなかったことにはできないし、その殉国の至純を、ただ強制の悲劇とか、非人道的な命令の犠牲者とかの言葉だけでは括れない。「靖國で会おう」と約束して逝った彼らも、そんなことは望んでいまい。彼らは無知ではなかった。戦争が悲惨、理不尽なものであることは承知の上で、なお彼らは決意し、戦い抜き、そして逝った。・・（中略）・・

海軍の報道班員として各地の戦場を巡った、明治人にして歴史作家の山岡荘八はこう綴っている。

「もはや完全に日本軍は負けているのだ。したがって自殺行為を少なくするためには条件のいかんは問わず、終戦に導くべきだという理性に通ずる。

ところが、一方にはそうした計算を愍笑（びんしょう）する感情の奔流もあった。いや、決してこれも感情だけのものではない。仮りに鹿屋の飛行場で、特攻の出番を待っている若者たちに、『―それは自殺行為だ』などと云ったら、彼らは苦笑して首を振ったに違いない。私自身、それに近いことを云って、愍笑されたことがある。

『―日本人という人間の生きているのは、今日、只今だけではない。永遠ですよ』と。そして、その学鷲は私に『―往生』という言葉の意味がわかるかと問い返して来た。」（『小説太平洋戦争』）

この学鷲の言葉は、果たして苦役を強いられた結果だろうか。

・・（中略）・・

陸上での決戦がもはや覚束なくなっている頃、大西瀧治郎が第一航空艦隊の司令長官として着任すべく二〇一空戦闘隊の基地マバラカット飛行場に到着したのは、昭和十九年十月十九日だった。第一航艦の実働可能機は四十機ほど。陸軍も六十数機しかなかった。敵は七百三十余隻の艦船に数個の機動部隊によってフィリピン周辺を埋め、それこそ虱潰しに我が航空基地群を蹂躙していた。

大西中将を出迎えたのは、第一航艦の猪口力平先任参謀と二〇一空の玉井浅一中佐だった。大西中将は猪口参謀、玉井中佐のほか、第二十六航空戦隊の吉岡参謀と指宿、横山両飛行隊長に捷一号作戦を成功させるための特別攻撃隊の編成を〝下命〟した。

日本にはもう米海軍と太刀打ちできる空母は皆無に等しい。そこで栗田戦艦部隊（連合艦隊の第二艦隊、第一遊撃部隊）をもってレイテ湾に突入し、大和、武蔵といった超弩級戦艦の主砲で米艦船を蹴散らし、マッカーサーの上陸を阻止する。それしか戦局を挽回させる手立てはない。航空部隊としては、少なくとも一週間、敵空母の甲板を使用不能にさせる。そうすれば栗田艦隊はレイテ湾に突入できる。そのためには零戦に六〇キロ爆弾を積んで空から攻撃する従来の戦法では及ばない。これに二五〇キロ爆弾を抱かせて、体当たりをやるほかに確実な攻撃法はない。

大西長官の意見に部隊幹部たちも同意し、その夜のうちに第十期飛行予科練習生を中心に部隊編成が行われ、指揮官の選定に当たっては玉井副長と猪口参謀が協議した結果、翌二十日午前一時過ぎ、猪口参謀の教え子で海軍兵学校第七十期の関行男大尉が選ばれた。

関行男大尉は、玉井副長から特攻隊指揮官に指名されたとき何と答えたか。数秒黙考したのち、「やらせてください。それよりほかに方法はない・・と私も考えておりました」とその場で承諾したという話と、「一晩考えさせてください」と即答を避けたという話と食い違って今に伝えられている。

その場にいた猪口参謀は、戦後の著書『神風特別攻撃隊』で、「関大尉は唇をむすんで、何の返事もしない。両肘を机の上につき、オールバックにしている長髪の頭を両手で支えて、目をつむったままうつむき、深い考えに沈んでいった。身動きもしない。・・一秒、二秒、三秒、四秒、五秒・・・。と、彼の手がわずかに動いて、指が髪をかき上げたかと思うと、静かに頭を持ち上げていった。『ぜひ、私にやらせてください』少しの澱みもなかった。玉井中佐も、ただ一言『そうか』と応えて、じっと関大尉の顔を凝視していた」と記した。

一方、玉井中佐は戦後、仏門に入って戦死した部下たちの御霊を供養していたが、あのときの関大尉は「一晩考えさせてくれ」と言ったのが本当のところだったと語っている。

当時、同盟通信の特派員で海軍報道班員だった小野田政によれば、出撃前の関大尉は特攻作戦に気乗りしない様子で、「僕のような優秀なパイロットを殺すなんて、日本もおしまいだよ。やらせてくれるなら、僕は体当たりしなくとも五〇〇キロ爆弾を空母の飛行甲板に命中させて帰ることができる。僕は天皇陛下のためとか日本帝国のた

めとかでいくんじゃなくて、最愛のＫＡ（※注　海軍の隠語で妻のこと）のために行くんだ。命令とあらば仕方ない。日本が負けたら、ＫＡがアメ公に何をされるかわからん。僕は彼女を守るために死ぬんだ。最愛の者のために死ぬ。どうだ素晴らしいだろう」と語った。関はこの年五月に結婚式を挙げたばかりだった。

明けて二十日午前、大西中将は特攻隊員と決まった二十四名に初めて直接訓示した。

「日本はまさに危機である。この危機を救い得るものは、大臣でもない、軍令部総長でもない、もちろん自分のような長官でもない。それは、実に、諸子のような、純真にして気力に満ち充ちた若い人々の祖国愛である。（中略）諸子の胸に燃えている純真な精神以外には何もないのだ。自分は、一億国民に代わって諸子にお願いする。どうか、切に、成功を祈る。

みなはすでに神である。神であるから欲望はないであろう。が、もしあるとすれば、それは自分の体当たりが無駄ではなかったかどうか、それが知りたいということであろう。しかし、みなは、もう永い眠りにつくのであるから、残念ながら知ることもできないし、知らせることもできない。だが自分は、これを見届けて、必ず上聞に達するようにするから、そこは安心して行ってくれ。よいか、決して諸子だけは殺さんぞ。しっかり頼む。」

こうして大西中将は〝特攻隊生みの親〟とされるが、特攻作戦が彼一人の発案、独走によるものでないことは明らかで、海軍では十九年三月に人間魚雷「回天」が計画され、人間爆弾「桜花」を配備した特攻隊・神雷部隊の編成も同年九月に始まっていた。〝厳秘〟のまま進められ、フィリピンでの神風特攻隊よりも早く編成されている。十九年七月から九月にかけ、回天や桜花だけでなく、震洋（ベニヤ板製の小型モーターボートの艇首部に二五〇キロの炸薬を搭載し、搭乗員が乗り込んで敵艦に体当たり攻撃することを目的とした特攻兵器）も完成、それぞれ部隊編成に入っており、陸軍もまた海軍の震洋に似たⓁ艇を完成させ、航空特攻兵器として四式重爆や九九双軽の体当たり機への改造に着手していた。少なくとも十九年の前半から陸海軍の中枢においては人間の命をもって兵器とする「特攻」作戦は考えられていたのである。

神風特攻隊は十月二十一日、大和隊、敷島隊、朝日隊、山桜隊の計二十四機が出撃したが、悪天候などに阻まれて大和隊の久納好孚中尉以外の全機が帰還した。未確認ながら久納中尉はセブ島近海で豪海軍の重巡洋艦に体当たりしたのではないかとされ、戦果についての記録は「特攻ニ対スル熱意ト性情ヨリ判断シテ不良ナル天候ヲ冒シ克ク敵ヲ求メ体当タリ攻撃ヲ決行セルモノト推定ス」とある。

翌二十二日、二十三日、二十四日と出撃は続くものの、悪天候にさえぎられて、関大尉率いる敷島隊が目的を達したのは十月二十五日だった。関大尉以下五機の爆装零戦で、これに戦闘機四機が直掩についた（機長は西澤廣義）。米側の発表によれば、護衛空母セントローは飛行甲板に突入され大爆発を起こし沈没、同護衛空母カリニン・ベイ、ホワイト・プレーンズ、キトカン・ベイの三隻も命中ないし至近爆発で大破、中破と多大な損害を与えることに成功した。朝日隊、山桜隊、大和隊もそれぞれ突入し、護衛空母サンチー、スワニーに命中大破させるなどの戦果を上げ、これらを大本営は大々的に発表し、敷島隊指揮官だった関大尉が軍神として祭り上げられることになった。

関大尉の遺書には彼の決意と、懐悩とが滲んでいる。

「父上様、母上様

西条の母上（※注　愛媛県西条市に住む実母）には幼時より御苦労ばかりおかけ致し、不幸の段、お許し下さいませ。

今回帝國勝敗の岐路に立ち、身を以って君恩に報ずる覚悟です。武人の本懐此れにすぐることはありません。

鎌倉の御両親（注　満里子夫人の両親）に於かれましては、本當に心から可愛がっていただき、其の御恩に報ゆる事も出来ず往く事を、お許し下さいませ。

本日帝國の為、身を以って母艦に體当を行ひ君恩に報ずる覚悟です。

皆様御體大切に。　」

「満里子殿

何もしてやる事もできず、散り行く事はお前に対して誠に済まぬと思って居る。

何も云はずとも、武人の妻の覚悟は十分出来て居る事と思ふ。御両親に孝養を専一と心掛け生活して行く様、色々思出をたどりながら出発前に記す。

恵美ちゃん坊主も元気でやれ。

行男　」

関大尉は「ＫＡのために特攻に行くのだ」と語っていた。遺書に記された「帝國勝敗の岐路に立ち、身を以って君恩に報ずる覚悟」と、「ＫＡのため」という一体どちらが関大尉の本心だっ

たかという問いかけに意味はない。「KAのため」も「君恩に報ずる覚悟」も、どちらも本当の心情だったろう。そしてそれに矛盾はない。特攻という不条理は承知の上、新妻への想いも断ち難い。しかし、己の負った軍人としての使命を放擲するわけにはいかない。出撃を命じられて数日の内に彼は散華したが、そのわずかな時間の中でどれほど苦しみ、悩み抜いたかを思う。しかも悪天候によって、彼と彼が率いた部下は、死の決意をその都度しなければならなかった。

迷い、決断し、また悩み、それを断ち切って・・・、その繰り返しの中で彼らは透明な覚悟に至り、敵艦への体当たりをもって人生の完全燃焼と定めた。その心境なくして、果たして特攻攻撃が成功しただろうか。関大尉は、一切を超克した。関大尉に限らず特攻出撃した多くの若者がそうだったのではないかと感じる。

大西中将は昭和二十年八月十六日午前二時、官舎の一室において日本刀で割腹し、介錯も拒絶して苦悶のうちに責任をとった。遺書にはこう記されている。

「特攻隊の英霊に白す。

善く戦ひたり深謝す。最後の勝利を信じつつ肉弾として散華せり。

然れ共、其の信念は遂に達成し得ざるに至れり。

吾、死を以て旧部下の英霊と其の遺族に謝せんとす。

次に一般青壮年に告ぐ。

我が死にして軽挙は利敵行為なるを思ひ、聖旨に副ひ奉り自重忍苦するの誠ともならば幸なり。

隠忍するとも日本人たるの矜持を失ふ勿れ。

諸子は国の宝なり。平時に処し猶ほ克く特攻精神を堅持し、日本民族の福祉と世界人類の和平の為最善を尽くせよ。」

※

この八月、安倍総理による戦後七十年談話が出された後、私はマバラカットの東西飛行場跡を慰霊に訪れた。念願だった。現在、東西どちらにもKAMIKAZEを顕彰する碑が建っている。その内、一九七四年に西飛行場跡に「第二次世界大戦に於て日本神風特別攻撃隊が最初に飛び立った飛行場」との銘を刻んで建ててくれたのはフィリピン人のダニエル・H・ディソン氏である。

どちらの碑にも日本とフィリピンの国旗が掲示され、東飛行場跡には参道前に鳥居があり広場中央にカミカゼ飛行士像が立っている。その像を見上げ、跪いて合掌したとき、涙がこぼれ出てきた。温もりとともに、何かに抱き締められる感じがした。

「其の信念は遂に達成し得ざるに至れり」の一節を思い出し、「大西さん、信念は達せられたんじゃないですか」と心の中でつぶやいた。たしかに関大尉以下の特攻隊は、結果的に栗田艦隊のレイテ湾突入の成功には結びつかなかった。

しかし、ディソン氏はこう語っている。

「長い間フィリピンを植民地としてきたスペインやアメリカに比べれば、日本のフィリピン支配はほとんどないに等しいものでした。

日本は、そのたった四年の間にカミカゼ精神をもたらしてくれました。それは、フィリピンにとって最良のものでした。それは、忠誠心であり、規律であり、愛国心でした。それが、フィリピンが戦争の時代に日本から学ぶべき良い点なのです。

カミカゼはアジアの人間であり、アジアの英雄でした。」（『フィリピン少年が見たカミカゼ』）

ディソン氏のこの言葉を日本人が顧みなくなったとき「信念は遂に達成し得ざる」、確かにそんな日本に堕するだろう。

中央・ダニエル・H・ディソン氏
（平成27年４月27日訪問時）

マバラカット東飛行場跡の特攻勇士の像

マバラカット西飛行場跡の記念碑

平成28年度慰霊行事予定（当顕彰会主催及び他団体主催慰霊祭参加予定）

（慰霊行事名）	（日時・場所）	（主催者名等）
①第38回特攻隊合同慰霊祭	28・3・26（土）靖國神社	（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
②旧海軍鹿屋航空基地特攻隊戦没者追悼式	28・4・2（土）小塚丘公園内慰霊塔前	鹿屋市
③宮崎特攻基地慰霊祭	28・4・3（日）宮崎特攻基地慰霊碑前	宮崎特攻基地慰霊祭実行委員会
④第40回都城市特別攻撃隊戦没者慰霊祭	28・4・6（水）都島公園内慰霊碑前	都城市特別攻撃隊戦没者奉賛会
⑤豫科練雄飛会戦没者靖國神社慰霊祭	28年4月上旬靖國神社	豫科練雄飛会
⑥第48回徳之島慰霊祭（戦艦大和を旗艦とする第二艦隊戦没者）	28・4・7（木）犬多布岬・慰霊塔前	鹿児島県伊仙町慰霊祭実行委員会
⑦第45回萬世特攻慰霊碑慰霊祭	28・4・10（日）萬世特攻慰霊碑前	南さつま市・萬世特攻慰霊碑奉賛会
⑧第56回出水市特攻碑慰霊祭	28・4・16（土）特攻碑公園慰霊碑前	鹿児島県出水市特攻慰霊碑顕彰会
⑨靖國神社春季例大祭（当日祭）	28・4・22（金）靖國神社	靖國神社
⑩秋田県特別攻撃隊招魂祭	28・4・29（金）能代八幡神社	招魂祭実行委員会
⑪第62回知覧特攻基地戦没者慰霊祭	28・5・3（火）知覧特攻平和観音堂前	南九州市・知覧特攻慰霊顕彰会
⑫福岡県特攻勇士慰霊顕彰祭	28・5・4（水）福岡県護国神社	福岡県特攻勇士慰霊顕彰委員会
⑬第50回特攻殉国の碑慰霊祭	28・5・8（日）特攻殉国の碑前	長崎県・川棚町新谷郷・殉国の碑保存会
⑭京都霊山護國神社特攻勇士之像慰霊祭	28・5・22（日）京都霊山護國神社	関西白鴎遺族会
⑮千葉県特攻勇士之像慰霊祭	28・5・26（木）千葉県護国神社	千葉県護国神社
⑯指宿海軍航空隊基地哀惜の碑慰霊追悼式	28・5・27（金）指宿海軍航空基地哀惜の碑	指宿海軍航空基地哀惜の碑顕彰会
⑰豫科練戦没者慰霊祭	28・5・29（日）陸自武器学校豫科練之碑前	海原会
⑱義烈空挺隊慰霊祭	28年6月上旬摩文仁の丘義烈空挺隊慰霊塔	全日本空挺同志会沖縄県支部
⑲大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭	28・7・3（日）靖國神社	（公財）大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会
⑳高野山慰霊祭	28・9・4（日）高野山「空」の碑前	全日本空挺同志会
㉑市ヶ谷台慰霊祭	28・9・14（水）市ヶ谷台駐屯地メモリアルゾーン	（公財）偕行社
㉒第65回特攻平和観音年次法要	28・9・22（木）特攻観音堂	世田谷山観音寺
㉓明野忠魂塔慰霊祭	28年10月上旬陸自航空学校内・明野忠魂塔前	（公財）特攻隊戦没者慰霊顕彰会
㉔原町飛行場関係戦没者慰霊祭	28年10月上旬南相馬市陣ヶ崎公園墓地	明野忠魂塔顕彰会
㉕旧海軍航空隊串良基地出撃戦没者追悼式	28・10・15（土）串良平和公園慰霊塔前	原町飛行場関係戦没者慰霊顕彰会
㉖靖國神社秋季例大祭（当日祭）	28・10・18（火）靖國神社	鹿屋市
㉗大阪護國神社特攻勇士之像慰霊祭	28・10・23（日）大阪護國神社	靖國神社
㉘神風特別攻撃隊戦没者慰霊祭	28・10・25（火）西条市大町楢本神社	大阪特攻勇士之像慰霊顕彰会
㉙特攻勇士之像慰霊祭	28・10・31（月）埼玉縣護国神社	神風特攻戦没者奉賛会
㉚回天烈士並びに回天搭載戦没潜水艦乗員追悼式	28・11・13（日）大津島・回天慰霊碑前	埼玉縣護国神社
		山口県周南市大津島回天顕彰会